



コミュニケーションで育む家族の絆

【秋田県家庭教育フォーラム】



◇石塚小枝子さんをコーディネーターに迎えてのパネルディカッション

10月2日(金)、県生涯学習センターで家庭教育フォーラムが開催され、当日は60名が参加し、基調講演やパネルディスカッションが行われました。

はじめに、河辺わさび座 代表 石塚小枝子さんの基調講演と団員のみなさんによる寸劇が披露されました。「劇で伝えた家族の絆」と題された講演では、わさび座を立ち上げた経緯も含めて、「人に好かれ、思いやりある子どもになってほしい。しつけは家庭教育が一番、親が子どもをしっかり見ていなければならない。」と、自分の子育て観を話されました。続いての寸劇は、今家庭で抱えている教育問題を様々なエピソードを織り交ぜながらの熱演で、笑いあり涙ありの一時でした。

パネリストの実践例紹介	子育てサークル あきたイクメンネットワーク 代表 本田 正博さん	・いつも忙しいママのために、一人でいられるフリーな時間を作ることを目標に活動している。野菜作りや楽器遊び等が主な活動であり、ママも含めた座談会も行っている。パパも家事を分担し家族みんなが Happy に！
	パステル和(NAGOMI) アートインストラクター 高橋みどりさん	・そのままの自分を認め、自分らしく生きることが大事。やる気や本気を求めるのではなく、ありのままの子どもを受け入れ、話を聴く場が必要である。信じて耳を傾ける人がいると子どもも話したくなる。
	株式会社秋田放送 経営推進局次長(兼)総務部長 柳沼 秀光さん	・男性社員の育児休業取得者を増やすために、その制度について説明したり、取得について会社全体に理解や協力を呼びかけたりして、子どもを産み育てやすい職場を目指している。

▽家庭を取り巻く環境が多様化している今、充実した家庭教育が求められています。パネリストによる特色ある実践例は説得力がありました。高橋さんは、自分が幼いころに経験したことも交えて、子どもを丸ごと受け入れて信じて話を聴くことの大切さを熱く語り、心を打たれました。3人のパネリストの実践は、心にゆとりをもって子育てをするためには必要なことのように思います。親子や夫婦のコミュニケーションの時間を大切にすることは、家族の絆を深めるとともに充実した家庭教育につながることを実感できた機会となりました。



◇基調講演をする石塚小枝子さん



◇わさび座による寸劇「家族の絆」



◇パネラーのみなさん

学校に授業を見に行こう！ ～地域とともにある学校の在り方に学ぶ～

地域の人たちが、自分たちが学んできたことを生かして学校や子どもと関わりをもつこと、つまり、子どもたちを育てることは、地域の活性化につながります。地域で子どもたちを育て、地域を元気にしている実践を紹介します。

9月16日(水)に、**大仙市立太田南小学校**を訪問しました。
太田南小学校の三浦仁校長から、



- ◎**地域とともにある学校**を「地域から支援を得ることにより学力向上等の学校課題の解決にあたる学校」「地域での生産活動や地域活動を体験的に学ぶ学校」と捉えていること
- ◎**地域とともにある学校**にするために学校では地域に対して活動計画を提示し、また、地域の人々は、自分たちができることを学校に発信し、プログラムを提案していること

と説明があり、多くの活動事例を紹介していただきました。

今回は、地域の人々が指導者となって活動する「クラブ活動」の時間を参観しました。目を輝かせて取り組む子どもたちの様子を見ることができました。指導者の皆さんも、自分が今まで学んできたことや得意な分野の指導ですから、指導にも熱が入り、とても良い関係が作られていることが分かりました。

見学終了後に協議会を行いました。各指導者からは、次のような発言があり、地域とともにある学校の一員としての意気込みが十分に伝わってきました。

- ・地域伝統の食を長く伝える理由も説明しながら伝えている。
- ・「不登校やいじめがないように」と願いつつ、活動している。



◇調理クラブ：JAの方が、「おやき」の作り方を指導しました。

▽学校支援地域本部事業の良さを十分に生かして、地域と一体になって子どもたちを育てている学校の在り方として、参考になる事例でした。地域コーディネーターの存在が非常に大きく、学校からの活動計画提示やその計画に対する地域の人々からの提案がスムーズにできている実践です。お互いの充実した結びつきが、地域の元気につながっていることを感じました。

行動人

《学んだことを生かして行動する人》

秋田には、学んだことを生かし、地域や周囲の人々を元気にしている人が大勢います。

地主重子さんは、秋田市雄和地区の学校で俳句づくり活動を指導しています。

雄和地区は俳人石井露月が生まれ、生活した場所で、俳句づくりが盛んな土地柄です。平成14年に行われた「世界俳句フォーラム」をきっかけに、俳句づくりの裾野を広げようと、学校の協力を得て、地域の子どもたちと活動を始めました。

＜新涼や俳号持ちし里の子ら＞

地主さんが子どもたちを詠んだ句です。「子どもたちの感性の豊かさには、いつも驚かされますし、温かい思いやりのあふれた句が多いことはうれしいことです。」と語り、俳句の“たね”をヒントに子どもたちとともに、言葉を紡いでいます。さらに、続けてきた俳句づくり活動について、「俳句づくりは漢方薬のようなものです。お腹いっぱいになることはありませんが、子どもたちの体の中に染み込み、心の栄養になるはず。子どもたちの成長を楽しみにしています。」とも、温かに微笑みながら話してくださいました。



可をつくろう
七五と季節のことばで
市俳句人連盟会長
岡部



↑「高尾山俳句会」で親子での俳句づくりを指導



←「なかよし俳句会」で子どもたちに講評